

# おとでつながる ふしぎなともだち

さく くらもち かおる  
作 倉持 香





おとでつながる  
ふしぎなともだち

さく くらもちかおる  
作 倉持 香

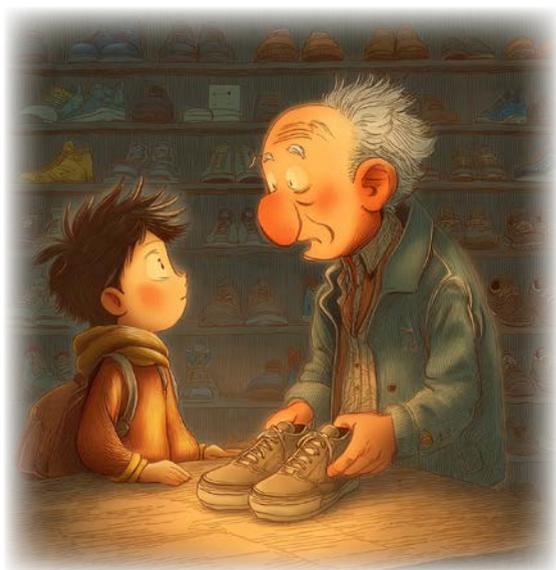




かあ  
お母さんとけんかをして、  
いえ で いえ  
家を出て行ったばかりのぼく。  
「どうせ、家にかえったって、  
またおこられるだけだし。」  
おも ある  
そう思って、まちを歩いていた。

まちのはしっこに、  
ひっそりとたっている<sup>ふる</sup>古い<sup>や</sup>くつ屋。  
その<sup>みせ</sup>お店で、  
ぼくはふしぎなスニーカーを<sup>み</sup>見つけた。

「このくつをはいたらね、  
ほんとうの<sup>おと</sup>音が<sup>み</sup>見えるんだよ。」  
<sup>みせ</sup>お店の<sup>おじい</sup>おじいさんが、  
<sup>こえ</sup>声をひそめてささやいた。





ぼくが くつをはいてみたら、  
なんだか <sup>からだ</sup>体 <sup>が</sup>かるくなって、  
ぼくは <sup>あ</sup>ぴょーんと、とび <sup>あ</sup>上がった！

すると、<sup>そら</sup>空にふわふわとただよう  
カラフルなもやが<sup>み</sup>見えてきた。  
<sup>ちい</sup>小さなベルのような<sup>おと</sup>音が、  
そっとひびいている。



もやに そっと さわると、パチンと <sup>ひか</sup>光って、  
すけすけの <sup>からだ</sup>体をしたふしぎな <sup>い</sup>生きものが  
あらわれた。

ぼくは ちょっと びっくりして、  
<sup>うし</sup>後ろに <sup>いっぼ</sup>一歩 さがった。

でも、その <sup>い</sup>生きものは ゆっくりと わらって、  
こわく なかった。

<sup>こころ</sup>心の中が <sup>なか</sup>あたたかくなって、ぼくは <sup>おも</sup>思った。

「……この <sup>こ</sup>子、 <sup>とも</sup>なんだか 友だち みたいだな。」

<sup>くち</sup>口を <sup>うご</sup>動かさないのに、<sup>こえ</sup>声 <sup>あたま</sup>が 頭 <sup>き</sup>にとどいた。

「やっと <sup>き</sup>きみが 来たね。」

「<sup>なまえ</sup>名前は ないけど、

みんなは モノモノ って よぶんだ。」

モノモノは、やさしく 変わった。



モノモノは、<sup>おと</sup>音を<sup>あつ</sup>集めて<sup>い</sup>生きているという。

やさしい<sup>おと</sup>音があると、

<sup>せかい</sup>世界が<sup>あか</sup>明るくなるんだって。

ぼくはモノモノといっしょに

<sup>おと</sup>音を<sup>あつ</sup>集めることにした。

「でも、<sup>おと</sup>音ってこんなにいっぱいあるんだ！」

<sup>き</sup>木の<sup>は</sup>葉の<sup>おと</sup>音や、<sup>あしおと</sup>足音、<sup>いし</sup>石が<sup>おと</sup>ころがる音、

なんだか<sup>たの</sup>楽しくなってきた。



でも、ぼくはまちがって……

「ギー」「グチャ」「ビリッ」—

きつくてにごった<sup>おと</sup>音をひろってしまった。

<sup>そら</sup>空がどろのようににごって、

モノモノがしずかにふるえた。

「この<sup>おと</sup>音がふえると、

ぼくの<sup>せかい</sup>世界がきえてしまう……」

モノモノは、ぼくに<sup>い</sup>言った。

「<sup>せかい</sup>世界をまもるためには、

とてもきれいな<sup>おと</sup>音がひつようなんだ。

<sup>いま</sup>今までで、

<sup>いちばん</sup>一番きれいだっ<sup>おと</sup>た音をおしえて。」



ぼくは、お母<sup>かあ</sup>さんと歌<sup>うた</sup>っていたことを  
おも<sup>だ</sup>い出した。

こ<sup>と</sup>きの<sup>とき</sup>お母<sup>かあ</sup>さんがぼくを  
ねかしつける<sup>とき</sup>時に<sup>うた</sup>歌<sup>うた</sup>ってくれたあの<sup>うた</sup>歌。

「でも、もうずっとその<sup>うた</sup>歌<sup>うた</sup>を歌<sup>うた</sup>ったことが  
ない」

ぼくは<sup>くち</sup>口<sup>くち</sup>ぶえをふいてみた。

お母<sup>かあ</sup>さんが<sup>うた</sup>歌<sup>うた</sup>ってくれたあの<sup>うた</sup>歌<sup>うた</sup>を、<sup>くち</sup>口<sup>くち</sup>ぶえで。

<sup>うた</sup>歌<sup>うた</sup>が<sup>ひろ</sup>どんどん<sup>ひろ</sup>広がって、

<sup>そら</sup>空<sup>あか</sup>が<sup>あか</sup>明る<sup>あか</sup>くなっていった。



モノモノは にっこりわらって、  
ぼくの手<sup>て</sup>をにぎった。  
「きみの <sup>おと</sup>音が、  
ぼくをまもってくれたんだね。」





「また <sup>あ</sup>会おうね。」

そう つぶやいて、

モノモノは空の<sup>そら ひかり</sup>光にとけていった。

ぼくのポケットの中で、  
ベルのような音がやさしくひびいていた。  
モノモノの顔がうかんできて、  
ぼくはなんだか温かいきもちになった。





そして、ぼくは <sup>いえ</sup>家にかえることにした。

<sup>いえ</sup>家にかえれば、まだ <sup>かあ</sup>お母さんがまっている。

「おこったとき、かなしいときは、あの <sup>うた</sup>歌を

<sup>おも</sup><sup>だ</sup>思い出そう」

<sup>かあ</sup>お母さんと、また <sup>おも</sup>なかなかおもしろいと思った。



ほんさくひん  
本作品のイラスト作成には AI を使用しています。  
さくせい  
しょう

さく くらもち かおる  
作 倉持 香

とうきょう う げんざい ざいじゅう  
東京生まれ。現在はドイツ在住。  
こ おとな はばひろ ねんれいそう  
子どもから大人まで、幅広い年齢層に  
にほんご おし にほんご こうし  
日本語を教えている日本語講師。

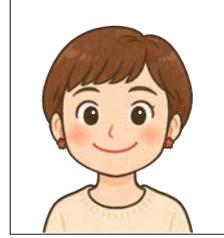
さいきん かつよう  
最近、AI ツールを活用して

えほん どうが デザインなどの

コンテンツを作成・販売することに夢中。

うんどう ドライブ、アウトドア、

そして着物が好きな多趣味人。



へんしゅう ありすえ じゆん  
編集 蟻末 淳

## おとでつながるふしぎなともだち

しよほんほっこう  
2025年11月20日初版発行

さく くらもち かおる  
作 倉持 香

はっこうじよ こくさいこうりゆうききん にほんぶんかいかん にほんごじぎょうぶ  
発行所 国際交流基金パリ日本文化会館日本語事業部





国際交流基金パリ日本文化会館日本語事業部